



生年1959年—橋大教授。一橋大学名誉教授。一橋大学大学院社会学研究科特任教授。『権力装置とスポーツ社会史』(講談社)、『12の問いから始めるオリンピック・パラリンピックの政治』(山川出版)、『1964年の東京オリンピックとその時代』(青弓社)、『成功神話と記憶のはざま』(幻の東京オリンピックとその時代) (青弓社)、『スポーツの世界史』(一色出版)など。

督をしていたとき、「ウチの子どもは殴ってくれて良いですから」という親が、けっこういたそうです。殴ると上手くなる、強くなる、試合に勝てる、という幻想が、まだまだ残っていると……。

坂上 それを指導者の熱心さとか情熱のように見てしまう。

玉木 しかし、そこには合理的な考えとか、科学的な根拠が、まったく存在していない。真夏の野球大会を40度近い気温の猛暑のなかで行うのも異常なら、そんな高校の部活動を全試合NHKが中継するというのも異常で、元文科大臣やNHKの幹部のなかにも、夏の甲子園大会廃止論に賛成してくれる人が少なからずいます。が、名前を出すのはNGで、「自分がNHK会長になっても甲子園大会の中継はやめられない」と言ったN

NH Kの幹部もいます。

坂上 情性とか慣習というものは、実は強い力を持っています。それ自体に明確な理屈が存在しませんから、反論したり対抗することもできない。世の中に染み付いているものと言えば良いでしょうか。それを扱うのが得意なのは人類学なんですが、その観点から見ると、甲子園大会は一つの儀礼であり、一つの祝祭、祝日として成り立っている。ふるさととか青春の物語など多くの要素で構成され、伝統という積み重ねにより大きなストーリーができあがっています。これを突き崩すには、「何のためにやっているのか?」という根本的な疑問をぶつけていくことでしょうね。

玉木 何のために夏の甲子園大会を行うのか? と疑問をぶつけて

主催者が「高校生の教育のため」と答えば失笑しますよ。本音は私学の宣伝ですからね。プロ野球を何故やるか? という問いに対する答えも、最終的には親会社の宣伝や利益のためでしょう。が、それは言うてはいけないことになっているところで、プロ野球は成

立しているわけですね。

坂上 タブーがたくさんあるわけですが、たとえばNHKという巨大メディアが、たかが高校生の部活動を、それも野球だけをなぜあれだけ長時間放送するのか? それは、普通に考えて「謎」としか言えませんよ。

玉木 本当に人気があるのか、多くの人に支持されているのか、それすらわからない。今年のセンバツ大会では優勝高校の投手が700球近い投球数を投げましたが、何の批判もなかった。それは1週間に500球以内という高野連の定めたルールに違反しなかったからです。そもそも1週間に500球というメジャーもプロ野球も絶対に許可しない球数を、まだ体格も体力も成長過程にある高校生の

ルールにしたこと自体がおかしいのに、何の批判も出ません。

坂上 情性や慣習には、それを守る強い力が、意味なく働くのです。

玉木 その結果、高校生が犠牲になっ

坂上 映画「シコふんじやった。」は、周防正行監督の母校の立教大学相模部をモデルにしている、そこに助っ人外国人力士としてイギリス人留学生が加わる。そして稽古は1日2時間とか契約書を作っ

て参加するんですが、その彼が「それは何故ですか?」という疑問を連発する。けど誰も曖昧にしか答えられない。そこで「日本人は物事の本質を見極めよう」としない」との結論に至る。「キリスト教の大学なのに何故土俵に神棚があるのか?」とかね。そういう問いかけを避けている。その結果、日本は平和的にやってこれたとも言えますが、本質に迫る議論はやりな

い。国会だって、そうでしょう。玉木 岸田首相も、官僚の書いた文章を読み上げているだけです。

坂上 議論じゃないですよ。

玉木 NHKは、「国会で論戦が